特集：翻　訳――翻訳とは何を翻訳するのか

# 和漢朗詠集から謡曲へ

飯塚恵理人（いいづか・えりと）

## 一　はじめに

世阿弥の『三道』（注1）の「能作書条々」に

三、書とは、其能の開口より、出物の品々によりて、「此人体にては、いかやうなる言葉を書きてよかるべし」と案得すべし。祝言・幽玄・恋・述懐・ぼうをく、色々の縁によるべき詩歌の言葉を、能の風体によりて、取り宛てがひて書べし。

とある。世阿弥自身が、詩歌の言葉を「祝言」「幽玄」「恋」「述懐」「ぼうをく」というジャンルに分けて把握し、それらを「縁」によって選択してその曲のシテの言葉を書いて行くように述べている注目すべき部分であろう。小林静雄氏（注2）は、この言葉を引用し、「謡曲作者が斯ういふ態度を以つて詞章を作つて居るのであるから、和漢朗詠集のやうな分類的詩歌集は此の上もない重宝なものに相違なかつたらうと思ふ。事実、謡曲作者は和漢朗詠集を座右に置いて常に使用して居たらしい。彼等の漢詩に対する智識は和漢朗詠集の外に出ること極めて僅かであつたことは、謡曲に引用されて居る漢詩の大半が和漢朗詠集に収められたものであることに依つても明らかである。」と述べている。言い換えれば、和漢朗詠集の「分類的詩歌集」であるという特徴が、謡曲作者にとって、詩歌の詞を自らどこにあてはまるか考えることをせずに、その分類を踏襲して受容することができるという面で、大変便利であったことになる。

芹川鞆生氏（注3）は和漢朗詠集の後代への影響を「文学の共通の広場のように、思いをのべ感懐をやる具として大いに利用され、あるいはうまく換骨奪胎といつて、違つた意味に替え用いたりして使われ、または上品にシャレのめされたり、根強い流布力をもつたのである。」と言われる。朗詠が、その本来の詩的世界を表現するのみならず、全く

異なる世界を表現することにも使用できたと述べるのだが、そのことこそが、和漢朗詠集が広く後代の文学に受容された理由であると言うのである。本稿では謡曲の和漢朗詠集受容の方法について述べて行きたい。なお本稿で取り上げるものは漢詩文に限定し、和歌の朗詠は取り上げない。

## 二　謡曲にはどれほど和漢朗詠集が取り入れられているのか

謡曲にはどれほど和漢朗詠集が取り入れられているのだろうか。芹川氏と私は、「謡曲」の範囲を、「古今謡曲一覧」(注4)に「室町時代成立と確定し得る曲」「室町時代成立と推定し得る曲」として載る曲と、『未刊謡曲集』(注5)の1冊から24冊までに含まれる曲と限定し、和漢朗詠集に収められている漢詩文についてこの調査を行った。和漢朗詠集(注6)に収められている漢詩文は伝藤原行成筆の御物本によれば、587句となる。この範囲での調査の結果、疑わしいものを除いて、謡曲367曲に、朗詠163句に対する614例の受容例が見つかった。この結果を『謡曲の和漢朗詠集受容』(注7)にまとめた。本稿はこの調査に拠っている。また、今後増える可能性は十分あるが、少なくともこれだけの数の受容例がある。10例以上謡曲に受容されている朗詠は16句に上る。部立の順に上げると、以下のようになる。

18　花下忘帰因美景　樽前勧酔是春風　（春興　12例）

27　背燭共憐深夜月　踏花同惜少年春　（春夜　12例）
42　礙石遅来心竊待　牽流遄過手先遮　（三月三日　21例）
115　遙見人家花便入　不論貴賤与親疎　（花　11例）
117　誰謂水無心　濃艶臨兮波変色
　　誰謂花不語　軽漾激兮影動脣　（花　10例）
129　落花狼藉風狂後　啼鳥龍鐘雨打時　（落花　11例）
221　林間煖酒焼紅葉　石上題詩掃緑苔　（秋興　13例）
242　三五夜中新月色　二千里外故人心　（十五夜　15例）
291　松樹千年終是朽　槿花一日自為栄　（槿　20例）
404　山遠雲埋行客跡　松寒風破旅人夢　（雲　10例）
545　謬入仙家　雖為半日之客
　　恐帰旧里　纔逢七世之孫　（仙家　10例）
588　願　以今生世俗文字之業狂言綺語之誤
　　翻　為当来世世讃仏乗之因転法輪之縁　（仏事　10例）
663　刑鞭蒲朽螢空去　諫鼓苔深鳥不驚　（帝王　15例）
733　琴詩酒友皆抛我　雪月花時最憶君　（交友　13例）
791　蝸牛角上争何事　石火光中寄此身　（無常　11例）
793　朝有紅顔誇世路　暮為白骨朽郊原　（無常　13例）

この16句に対する受容例のみで、207例となり、受容例全体の約三分の一を占めることとなる。これらは特に謡曲作者が好んで使用したものとなるが、春・秋の季節感が表現できるものと、酒宴に関連のあるもの、無常・仏事に関連するものが多い。このなかに「恋」に関係したものがないの

は、「恋」の表現の場合には漢詩よりも和歌を用いることが多いためかも知れない。能作者は、和漢朗詠集の朗詠をどれも受容したわけではなく、その「場面」にふさわしい朗詠を選んで受容した。能において春・秋の自然描写、酒宴の場面、弔いが、場面として多いことも、特定の朗詠の受容例を多くしている原因であるだろう。

## 三　朗詠を多く受容している曲

一曲の中に、和漢朗詠集の句を複数受容している曲もある。ちなみに、四句以上受容している曲を、現行曲・番外曲に分けて挙げると、以下のようになる。

**現行曲〔18曲〕**

《右近》（4例）《采女》（4例）《梅枝》（4例）《雲林院　乙》（4例）《江口》（4例）《咸陽宮》（4例）《西行桜》（6例）《昭君》（5例）《千手》（5例）《高砂》（4例）《経正》（4例）《木賊》（4例）《白楽天》（4例）《班女》（4例）《松虫》（6例）《山姥》（6例）《養老》（5例）《竜虎》（4例）

**番外曲〔9曲〕**

《甘糟》（4例）《生捕盛久》（4例）《語酒呑童子》（4例）《朱雀門》（6例）《大般若》（5例）《鼓瀧》（6例）《松竹　甲》（4例）《幽霊酒呑童子　乙》（5例）《義貞》（4例）

調査した曲は、番外曲の方が多いのだが、現行曲により朗詠を多用している曲が多いことになる。《右近》《采女》《江口》《西行桜》《高砂》《班女》《山姥》《養老》など世阿弥作の曲が多いことは、世阿弥の作能法を考える上でも注意すべきことだろう。以下、曲中での朗詠受容の方法に特徴の見られた《西行桜》《千手》を中心に、朗詠がどのように謡曲に取り入れられたかについて述べる。

## 四　《西行桜》の場合―季節・景物の表現

《西行桜》（注8）は世阿弥作の能である。朗詠の用いられている部分とそのもととなる朗詠の順に挙げると以下のようになる。

①たれか知る行く水に三伏の夏もなく、かんていの松の風、一声の秋を催すこと、草木国土自づから、見仏聞法の結縁たり。

164　池冷水無三伏夏　松高風有一声秋　（納涼）

②［哥］地　あたら桜の蔭暮れて、月になる夜の木の下に、家路忘れてもろともに、今宵は花の下臥しして、夜と共に眺め明かさん。

18　花下忘帰因美景　樽前勧酔是春風　（春興）

③シテ　まことは花の精なるが、この身も共に老い木の桜の、　ワキ　花物言はぬ草木なれども、　シテ

咎なき謂はれを木綿花の、　ワキ　影唇を　シテ
動かすなり
117 誰謂水無心　濃艶臨兮波変色
誰謂花不語　軽漾激兮影動脣　（花）

④「クリ」地　それ朝に落花を踏んで相伴なつて出づ、夕べには飛鳥に随つて一時に帰る。
127 朝踏落花相伴出　暮随飛鳥一時帰　（落花）

⑤「クセ」地　見渡せば、柳桜をこき交ぜて、都は春の錦、粲爛たり、
118 欲謂之水　則漢女施粉之鏡清瑩
欲謂之花　亦蜀人濯文之錦粲爛　（花）

⑥花を踏んでは、同じく惜しむ少年の、春の夜は明けにけりや、翁さびて跡もなし、翁さびて跡もなし。
27 背燭共憐深夜月　踏花同惜少年春　（春夜）

①はワキの西行の登場場面に用いられている。朗詠本来の意味は、「納涼」の部立にあるように、池のほとりの木陰の涼しさにある。しかし《西行桜》では、夏から秋へ季節の変化が無常を知らせ、仏法への結縁となるというように、意味を変えている。この朗詠を四季の移り変わりと仏法への結縁にとりなした受容例には《東北》（注9）の「シテ　見仏聞法の数かず　地　順逆の縁はいや増しに　日夜朝暮に怠らず　九夏三伏の夏闌けて　秋来にけりと驚かす　澗底の松の風　一声の秋を催して　上求菩提の機を見せ　池水に映る月影は　下化衆生の相を得たり」がある。《東北》のこの部分は《西行桜》の影響を受けて作られていると考えてよいであろう。

②は、西行と花見の人々が、花の下に臥して花を眺めようと言う場面に用いられている。和漢朗詠集の部立は「春興」であり、朗詠本来の意味は花の下で花を愛で、酒を飲む楽しさについて述べたものである。ここでは、「家路忘れ」て「花の下臥し」をするように物語を導き夜遊の雰囲気を作っている。

③は、前シテの桜の精が、ワキの西行に正体を明かす詞章である。桜の精は、西行の「花見んと、群れつつ人の来るのみぞ、あたら桜の、咎にはありける」という歌に対して、「憂き世と見るも山と見るも、ただその人の心にあり、非情無心の草木の、花に憂き世の咎はあらじ」と抗議する。そして西行に「おん身はいかさま花木の精か」と尋ねられてこのように答える。朗詠本来の意味は、「花は物を言うのであって、だからこそさざ波が立つ時は花の影も揺れて、その様子が唇を動かすように見える」というものである。水面に映った花の美しい様子を述べた朗詠を、「花が物を言う」根拠として使う例となる。

世阿弥がこの朗詠を受容する例は《雲林院　甲》にもある。ワキの公光が花を折るのに対して、シテの所の老人が花を折らせまいとする場面で、「ワキ　されば花物言はず

とこそ見えたれ、人にてはなを恋ひ心のあるは理ならずや　シテ　軽漾激して影唇を動かせば、われは申さずとも花も惜しきと言つつべし」となる。公光が「花は物を言わないから折っても文句は言わないだろう」と言うのに対して、シテは「花が唇を動かすという句もあるのだから、声に出すことはしないが、花自身も惜しんでいると言えるだろう」と反論する。この例も「花」が意思を持ち「ものを言う」例として受容している。世阿弥がこの朗詠を用いた受容例は、二例とも、もとの朗詠の、水に映る花の美しさを詠ずる世界とは異なった意味を持っている。

④はシテの桜の精が「有難や上人のおん値遇に引かれて、恵みの露あまねく」と、西行と会ったことを仏法の恵みを受ける縁となると述べる後の詞章である。朗詠本来の意味としては、親友と遊び暮らした日々の回想になるが、ここでは桜の精と西行が仲直りしたことを述べるために使われていると考えて良いだろう。この朗詠は伊藤正義氏が禅竹作の可能性が高いとする《松虫》でも、「〔サシ〕シテ　朝に落花を踏んで相伴つて出づ　地　夕には飛鳥に随つて一時に帰る　シテ　然れば花鳥遊楽の瓊筵　地　風月の友に誘はれて　春の山辺や秋の野の　草葉にすだく虫までも　聞けば心の友ならずや」と、風雅の友に誘われての遊楽を描くのに用いられている。《松虫》では、この朗詠から、「草葉にすだく虫」である「松虫」も「心の友」であるということを引き出しており、朗詠を用いながらやはり朗詠とは違う世界を作り出している。

⑤は桜の精が、西行の夢の中で、都の桜の美しい様子を見せる場面で用いられている。朗詠本来の意味は水に映る桜の美しさを詠んだものである。《西行桜》では、「見渡せば、柳桜をこき交ぜて」という遠景の描写を前におき、視点が水辺に移る形でこの朗詠を引用して空間的な広がりのある新しい世界を作っている。『謡曲の和漢朗詠集受容』を編む際には見落としてしまい、受容例に含めていない。

⑥は西行の夢が覚める終曲部に用いられている。朗詠本来の設定では、集まっている友人は「少年」であるはずだが、ここでは「春の夜を惜しむ」という意味のみを取り入れ、その設定までは取り入れていない。

## 五　《千手》の場合―宴会の描写

能の《千手》の作者は金春禅竹である(注10)。この曲の素材は、『平家物語』巻第十「千手前」(注11)である。重衡と千手の酒宴の最初の場面には、《千手》全体で受容例が5例あるうちの3例がある。この部分に限定して、《千手》の朗詠の受容方法について考えたい。まず、《千手》の本文とこの部分に受容されている朗詠を挙げると、

①ツレ　今はいつしか憚りの　心ならずに思はずも
　手まづ遮る盃の　心ひとつに思ふ思ひ
42　礙石遅来心竊待　牽流遄過手先遮　（三月三日）

②ワキ　それそれいかに何にても　おん肴にと勧むれば　シテ　その時千手とりあへず　［（クリ）］シテ　羅綺の重衣たる　情なき事を機婦に妬む　［クドキ］　シテ　ツレ　ワキ　ただいま詠じ給ふ朗詠は　添くも北野の御作　この詩を詠ぜば聞く人までも　守るべしとのおん誓ひなり

466　羅綺之為重衣　妬無情於機婦
管弦之在長曲　怒不関於伶人　（管弦）

③ツレ　さりながら重衡は今生の望みなし　シテ　ツレ　ワキ　ただ来世の便りこそ聞かまほしけれと宣へば　シテ　わらは仰せを承り　［一セイ］シテ　十悪といふとも引摂すと　地　朗詠してぞ奏でける

591　雖十悪兮猶引摂　甚於疾風披雲霧
雖一念兮感応　喩之巨海納涓露　（仏事）

となる。《千手》の重衡と千手の酒宴の場面は『平家物語』の記事にかなり忠実で、朗詠についても、『平家物語』の記事から受容したと考えるのが自然である。しかしながら、「能」という「劇」の酒宴の場面を作る際に、この「朗詠」を選択しているのは、劇中で「宴会」の場面を作る上で効果があるからであり、この《千手》の受容の方法は、他の謡曲における朗詠の受容方法と通う。

①の朗詠の部立は「三月三日」である。朗詠本来の意味は、「詩を作る前に自分の前を盃が通り過ぎようとした者は、まず手で盃を留めてあわてて詩を作る。」という意味で、曲水宴の遊びの場を描写した内容である。《千手》では、この受容例の前の「上ゲ歌」に「きつつ馴れにし妻しある　都の雲居を立ち離れ」と重衡に都に妻があることが語られる。また「かけぬ情のなかなかに馴るるや恨みなるらん」と、都の妻への遠慮と、自らの命が長くないであろうことから、重衡が千手への思いを自制していることが述べられる。この「手まづ遮る」は、千手への思いを自制する心がありながら、「心ならずに思はずも」盃を取ってしまったことを表現している。《千手》では重衡の心の揺らぎをこの朗詠の引用によって表現したと言える。《千手》ではその結果、「心ひとつに思ふ思ひ」と、重衡と千手の心が通ったことを述べるが、これももとの朗詠の世界にはなかったものが、朗詠の言葉を用いつつ新たに作られてゆく例となるだろう。

②の朗詠の作者は菅原道真である。和漢朗詠集の部立は管弦である。美しい妓女の力ない様を描いた句で、その妓女の舞を見ていると薄い羅綺の衣すら重く見えるという内容である。酒宴を題材として美しい妓女の様子を詠んでいるという意味で言えば、この酒宴の場で重衡の心を浮き立たせるために、妓女である千手が謡うのにふさわしい曲であるとも言える。しかし、《千手》ではこの朗詠が菅原道真作であることが意識され、「この詩を詠ぜば聞く人までも　守るべしとのおん誓ひなり」と、北野天満宮の加護を祈るために千手がこれを吟じたと解釈されている。これは『平家物語』にすでに見られる解釈である。このような朗

詠の使われかたは、朗詠の「意味内容」を離れて、その朗詠に付会する「伝説」が新たな意味をもって曲の中で使われるという点で注目される。

③の朗詠は「仏事」に含まれ、「阿弥陀仏の本願は、たとえ十悪を犯したような悪人でも浄土へ引き取って下さる」という内容である。酒宴に適した内容ではないが、重衡の「ただ来世の便りこそ聞かまほしけれと宣へば」という内容に応えたものと言える。宴会の場面に朗詠を謡わせることは、《紅葉狩》《船弁慶》でも見られる。単に酒宴であることを示すのみならず、《紅葉狩》ならば紅葉の美しさ、《船弁慶》ならば別離と船出といった、酒宴の意味を謡わせる朗詠を選択することができることも、酒宴の場面に朗詠が多く使用された理由だろう。

## 六　まとめ

謡曲は朗詠の「言葉」を採っているものの、必ずしもその「題」や「内容」までも取り入れていない。朗詠を謡曲の場面に取り入れることは、その朗詠の「世界」を「翻訳」して謡曲の世界を構築することになるのだが、それはもとの朗詠が描く「世界」とはかなり異なっている。言い換えれば、それが可能であったが故に能作者は好んで曲中に朗詠を受容したとも言える。ただ、すべての能作者が朗詠を好んで自作に取り入れたわけではなさそうで、作者が描こうとする世界によって相違がある。やはり世阿弥・禅竹といった世阿弥グループの作者が朗詠の受容を最も好んだと言えそうである。今後、世阿弥作品と朗詠の受容の関係について考えて行きたい。

注1　『世阿弥　禅竹』　表章　加藤周一校注　日本思想大系24　昭和49年4月発行　岩波書店　135頁

注2　「和漢朗詠集と謡曲」　小林静雄（「倭文生」の筆名で執筆）「観世」昭和10年5月号　63頁

注3　「謡曲古典和漢朗詠集の鑑賞（1）」　芹川鞆生　「観世」　昭和31年9月号　18頁

注4　「古今謡曲一覧」『古今謡曲解題』所収　丸岡桂著　西野春雄補訂　昭和59年2月発行　古今謡曲解題刊行会

注5　『未刊謡曲集』　田中允編　昭和38年9月発行（第1巻）～昭和50年5月発行（第24巻）古典文庫

注6　『和漢朗詠集』　大曽根章介　堀内秀晃校注　新潮日本古典集成　昭和58年9月発行　新潮社　309頁　本稿での和漢朗詠集の引用文・句番号は全て同書による。

注7　『謡曲の和漢朗詠集受容』　芹川鞆生　飯塚恵理人著　平成5年3月発行　奇呆虎洞　有精堂発売

注8　『謡曲集　上』　横道萬里雄　表章校注　日本古典文学大系40　昭和35年12月発行　岩波書店　《西行桜》《雲林院甲》の引用は全て同書による。

注9　『謡曲集　下』　伊藤正義校注　新潮日本古典集成　昭和63年10月発行　新潮社　63頁頭注25参照《東北》（曲名《軒端梅》として収録）《松虫》の引用は全て同書による。

注10　『謡曲集　中』　伊藤正義校注　新潮日本古典集成　昭和61年3月発行　新潮社　466頁参照　《千手》（曲名《千手重衡》として収録）の引用は全て同書による。

注11　『平家物語　下』　高木市之助　小澤正夫　渥美かをる　金田一春彦校注　日本古典文学大系33　昭和35年11月発行　岩波書店　260－266頁

――椙山女学園大学助教授――